

第4回第5次市民自治推進会議

会 議 録

日 時：2024年3月27日（水）午後6時30分開会
場 所：札幌市役所 12階 3・4号会議室

1. 開 会

○事務局（藤間推進係長） お時間となりましたので、第4回第5次市民自治推進会議を開催いたします。

事務局の藤間です。よろしくお願いいたします。

お手元の次第に沿って進めたいと思います。

本日も議事からスタートですので、ここからは鈴木座長をお願いしたいと思います。

2. 議 事

○鈴木座長 北星学園大学の鈴木でございます。

座長を仰せつかっておりますので、私のほうで進行を務めさせていただきます。本日もよろしくお願いいたします。

それでは、お手元の次第に沿って進めてまいります。

前回、2月1日に開催しました第3回の会議では、仕組みにおけるツールの位置付けについて、また、市政に関する具体的なテーマを用いた手法の検討について議論を行いました。

本日は、デジタル戦略推進局の渋谷スマートシティ推進部長にお越しいただいておりますので、前回の議論を踏まえまして、議事（1）として、今後活用可能な市のツールについて議論を行ってまいりたいと思います。

それでは、渋谷部長より資料のご説明をお願いいたします。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） スマートシティ推進部長の渋谷と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今後活用可能な市のツールという資料に沿ってご説明をさせていただきます。

前回の会議では、ツールの位置付けとして、意見、意向の把握などのための有効な手段の1つであって、目的に合わせて様々な手法を組み合わせる必要があるとされたというふうに伺っております。

そこで、本日は、三つの具体的な手段、道具についてご紹介させていただきたいと思っております。

まず1つ目は、さっぽろ圏スマートアプリを活用するということです。

こちらは、スマートフォンにアプリをダウンロードしていただいて、登録した方を対象にアンケートができます。

メリットとしましては、一定の登録者を確保しておくことができることと、登録者の生年月日、性別、都道府県、郵便番号を含めて情報として取得できるということです。それから、アンケートに答えてもらうためのインセンティブとして、ポイントの付与、場合によっては抽せん方式も取れますが、こういったことができるということです。それから、メールアドレスやショートメッセージサービス（SMS）や、アプリ上のお知らせ機能を使って情報発信ができるというメリットがあります。

一方、デメリットもございまして、札幌市民に限定することができないということ、そもそもアプリをダウンロードすることへの抵抗感が生じて登録者が増えないという懸念があること、それから、一定の登録者を確保できるということは、反面で、回答者が固定されるという側面もあるということが考えられます。

こういったメリット、デメリットをまずご紹介させていただきました。

続いて、下段になりますが、2つ目の手段、方法です。

こちらはご承知かもしれませんが、札幌市の公式LINEとスマート申請というアンケートフォームを併せて活用するということです。

前回の会議でも、学生の方々が市民アンケートで使っているというグーグルフォームやマイクロソフトのフォームズの話も出たと伺っておりますが、札幌市では、Graffier社という会社が提供しますサービスで、ウェブのアンケートフォームをつくって、札幌市公式LINEに友だち登録をしている方に情報発信をしてアンケートを取ることができます。

この方法のメリットとして、まず、18万7,000人に情報が発信できるということで、これは既に登録者がいるということです。それから、LINEは既にダウンロードされていて、ふだん使いされているということがあると思います。

これは、既存ツールの組合せで考えておりまして、別途費用はかかりますけれども、例えば、LINEとLINE Payのマイナンバーカードの本人認証機能を連動させることができまして、こういうものを活用することでの拡張性も考えられると思います。

一方、デメリットですが、こちらも札幌市民に限定することができないということです。ただし、マイナンバーカードで本人認証を組み合わせれば可能になります。

それから、事前に属性情報を取得できないので、アンケートに回答していただくときに属性入力を求める必要があるということです。また、特定の属性の方などに通知を送ることができないので、例えばモニター制度のような継続的なアンケートができないということも考えられます。

資料の2ページ目です。

3つ目の手段として、アンケートツールを開発するというのを考えてみました。

ここまでご紹介しました2つの手段は、いずれもスマートフォンというデバイスの活用を前提としておりますが、私どもデジタル戦略推進局で行っている様々な施策でも、常にデジタルディバイド、情報格差の問題に突き当たるところがございます。

こういったことを念頭に置きつつ、前回の会議で話題となりましたアナログとデジタルの使い分けと組合せを意識しながら、幅広い対象にアンケートをすることができると考えたところです。

これは細かくなりますけれども、システム改修の要件としましては、住基データから対象者を抽出していただくことができますので、そこから、案内はがきを作成して、お送りして、はがきで返信していただく、あるいは、ウェブアンケートの二次元コードを使って回答し

ていただく、こういったことができるようにしたいと考えております。

それから、アンケート項目はどうしても物理的に少なくなってしまうかもしれませんが、自由記載欄を設定することが考えられます。さらに、消し込みをすることもできますので、重複回答を防ぐということもできる可能性があるということです。

メリットとしましては、札幌市に住民登録のある市民に限定できるということと、デジタル、アナログといずれの方法での回答も選択できるということがあります。

住民基本台帳ファイルの利用手続が札幌市の中で決められておりまして、この手続の目的に合致する範囲で、例えば、年齢ごと、子育て世帯、特定の区にお住まいの方に対してというように限定してアンケートをすることもできると考えられます。

一方で、こういった仕組みをつくることになりますので、システムの改修費、あるいは継続して利用するというのであれば保守の運用費が高くなってしまおうというデメリットもございます。

改修に当たっての初期費用については、あくまでも概算ですが、税別で6,900万円ほどの参考見積りが上がってきております。それから、ウェブアンケートのシステムの保守、運用につきましては、月額45万円がかかるということです。

これはあくまでも参考見積りですが、これに加えて、印刷費や郵送費も別途必要になるということも重ね合わせなければならぬと考えております。

非常に雑駁ではございましたが、3つの具体的な手段を検討してみましたので、そのご説明をさせていただきます。

○鈴木座長 どうもありがとうございました。

それでは、事務局からもお話があるようですので、よろしく願いいたします。

○事務局（寺川町内会支援担当係長） 事務局の寺川でございます。

今、渋谷部長からご説明差し上げた中で、資料の1ページ下段のスマート申請のお話がありました。このアンケートフォームについてももう少しイメージを持っていただくため、事務局でデモを用意させていただきましたので、画面をご覧くださいと思います。

今、ご覧をいただいているのがアンケートフォームです。

今回、テストとして、成人の日行事に関するアンケートをご用意しております。

まず、トップページがこのようになっておりまして、このアンケートフォームに誘導するには、公式LINEでお知らせをする、あるいは、二次元コードも印刷が可能ですので、郵送物、はがきなどに印刷してこちらにアクセスしていただくことが可能です。

まず、こちらにアクセスしていただいたら、利用規約をお読みいただき、同意をいただいて、回答開始を押していただきますと、質問に移ります。

デモとして何問か用意しているのですが、例えば、あなたは現在何区にお住まいですかということで、中央区とさせていただきます、あなたの性別を教えてください、女性です、あなたはどのような立場ですかという形でどんどんお答えいただいて、回答が終われば次へ進みまして、このように全部に回答すれば送信をする形になります。

回答が終わりましたら、実施主体にはアンケートの回答のデータがどんどん集まってきて、今、画面上で回答した中央区の女性の回答がこのように集計されてくる仕組みになっています。

アンケートにたくさんの方からご回答をいただきましたら、結果をCSVでダウンロードすることが可能になっておりまして、集計に利用できる形になっています。

最後に、二次元コードの生成も可能でございまして、このデータを利用して、印刷なりLINEなどで共有をするなりして、そちらからアクセスをいただくことが可能になっています。

事務局からの補足は以上でございます。

○鈴木座長 デモもしていただきまして、どうもありがとうございました。

それでは、ただいまの今後活用可能な市のツールについてというご説明に関してご質問等はございますでしょうか。

最初に確認ですが、さっぽろ圏スマートアプリのダウンロード数を教えていただいてよろしいですか。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） 現在、まだ概算ですが、五千数百というところでございます。

○鈴木座長 また、LINEのほうは18.7万人ということですが、これは年々増えているものなのでしょうか。確か防災面で通知などもあったかと思えます。

○オブザーバー（斎藤広報部長） そうですね。年々増えております。

実は、コロナが流行して、ワクチン情報を流したときに急激に増えた経緯があります。

また、今日の市長記者会見でも説明させていただいたのですが、明日から、新しいアプリで、今日は何ごみかが分かるようにする機能や多言語化といった機能を実装していきますので、それをきっかけにまた少し増えるのかなと思っていますところでは。

○鈴木座長 アプリの周知方法について教えてください。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） 周知は、札幌市のホームページ等を通じてのご案内と、市内で各種のイベントを行う際に、このアプリをダウンロードしてご活用いただく、そういう形で徐々に周知を図っている状況です。

○鈴木座長 ありがとうございました。

そのほか、委員の皆様からご質問やご意見がございましたらお願いいたします。

大村委員、いかがでしょうか。

○大村委員 LINEのスマート申請のところに、令和6年1月に1度、アンケートを実施しているとの記載があるのですが、これはLINEを受信した人は誰でも回答できるというものですか。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） 市民の皆さんの誰でも回答ができる状況をつくらせていただいております。ただ、LINEの登録をしていただいていることを前提にしながらのアンケートになります。

○大村委員 それは、どのくらいの方から回答を得られたのですか。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） 800件程度ということでございます。

○鈴木座長 そのほか、ご質問等はございますでしょうか。

○三上委員 先ほどのLINEのスマート申請のところですが、市民に限定するために別途費用がかかると書いてあるのですけれども、これはいくらぐらいかかるものなのでしょうか。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） こちらも、具体的に実施したものではなくて、本当に概算になりますけれども、例えば、人口規模に応じて、月額制、あとは従量課金制を考えております。

ざっくりとですが、例えば、1万2,000件の応答で73万5,000円ほどございます。加えて、1万2,000件を超えたら1件当たり50円を加算していくという数字を参考としていただいております。

○三上委員 それは月額ですか。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） 月額です。対象が1万2,000件ということ的前提にしておりますので、申し訳ありません。

○鈴木座長 ほかに何かございますでしょうか。

○野田委員 費用に関するところで、何にかかっているのかを十分理解していないので、その辺を教えてほしいと思いました。

初期費用が7,000万円ほどと決まるとして小さい金額ではなくて、さらに運用、保守で月45万円ということ。この初期費用は、庁内のシステムに紐づけるという辺りですごくお金がかかるということですか。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） 初期費用の参考見積りの内訳をご紹介します。

初期費用は大きく3つございまして、まず1つは、アプリケーションの開発費用で2,500万円ほどです。これは、対象者を抽出する機能を改修しようということと、アンケートのはがき等の印刷機能や回答者の消し込み機能をつくるということで2,500万円ほどの積算です。

それから、インフラ増設費用ということで、こちらも2,500万円です。これは、データを取り込むインターネットと接続できるサーバー等の設置ということで、インフラ部分の積算です。

3つ目は、ウェブアンケートのシステムのパッケージの費用として、1,900万円でございます。

これを合算しまして、本当に概算ではございますが、税別で6,900万円という参考の金額をいただいております。

それから、ウェブアンケートシステムの保守、運用に関しては、申し上げましたとおり、月額で45万円という積算をいただいております。

○野田委員 恐らく、札幌市さんのレベルでいくと、デジタル人材としてそういった方を雇われているような気がしていますので、私は内製化できると思っています。2つ目の郵送に関わる郵便代は仕方がないという気はするのですが、アプリの開発は庁内で全くできないのですか。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） 今の力で内製化ができるかというところ、ちょっと難しいところがあります。これは、実際に着手しているわけではなくて、あくまで事業者の方にやっていただくとすればということで参考見積もりを頂戴したということです。

○野田委員 内製化できるところは、できる限りやったほうがいいと思います。

私のゼミ生でも、プログラミング言語が全くできない者に、数か月でこういうものをつくってと言って、見よう見まねでできる範囲のことは結構あります。先ほど見たアンケートの仕様よりももっと高度なものをつくられるという気はしますが、今、デモで見せていただいたレベルのものであれば、普通にフォームズなどで、今はただで全部できますよね。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） そうですね。

○野田委員 ですから、サーバーでお金がかかるのは分からなくもないですし、すごく大きく見積もったらこんな感じなのかなという気はしますが、もうちょっと内製化できる部分は内製化されるという前提のほうがいいと思います。

また、運用、保守で毎月45万円というのは、全体の予算からしたら小さい金額なのでしょうけれども、このサービスだけで45万円というのはそんなに安くはない気がします。デジタル人材を中途採用するということがありますので、現実問題として、IT関係の企業から札幌市に派遣されている方々に転職してもらおうとか、市役所の職員になりたいという人はいっぱいいますので、内製化できるところは内製化していったほうがいいような気がしました。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） 内製化ができる人材を育成するということは、我々も大きな主題の1つとして考えております。

一方で、今回、対象者の抽出などを行う際に、基幹系のシステムに手を加えなければならないという側面もございまして、その費用は内製化では賄い切れない部分もあるというところをご理解いただければと思います。

○野田委員 それはおっしゃるとおりだと思います。基幹系のシステムとの連動というところはそうかもしれないというふうに想像していました。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） ありがとうございます。

○鈴木座長 ほかにご質問等はございますでしょうか。

○片山委員 札幌で大雨が降ったときにLINEに登録していた時期があったのですが、その後、自分が欲しい情報以外のものがたくさん、だんだん見なくなってしまって、結局、今は削除してしまいました。子育て中のお母さんとか、いろいろな交流の機会が欲しい人は結構見るのだろうという内容でしたが、今の登録数から見ると、なかなかピンポ

イントというほど使い勝手がよくないのかなという気がしています。

また、アンケート情報も、時系列に積み重なるLINEの中に埋もれてしまうと、届きにくいなと思いました。

さっぽろ圏スマートアプリは使ったことがないのですけれども、札幌圏というのはどのぐらいの範囲で、どのぐらいの人が登録していて、どういった情報をどのぐらいの頻度で発信しているのか分かりますか。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） ご指摘のとおり、対象が札幌圏になりますので、札幌のみならず、周辺の自治体と共有をして使おうという道具としてご用意しております。

これはスマホの画面イメージですが、ここにサービスを提供させていただいておりまして、例えば、ヘルスケアということで、札幌市の施策もここに絡めながら展開しておりますけれども、今、五千数百というユーザーの方がいらっしゃるが、サービスを加えていく形で、プラットフォーム型のアプリにしていきたいという思いで進めております。

ですので、申し上げましたとおり、いろいろなイベントで使っていただくということで、ヘルスケアもそうですし、SDGs、環境行動、歩くということなど、様々なサービスをここに加えていってご利用いただきたいということで、あくまでもプラットフォームの道具としてご用意している段階です。

○片山委員 LINEとは違って、登録していても、アイコンを自分で開かない限り、全部の情報が入ってくるわけではないということですね。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） おっしゃるとおりです。下のほうにお知らせ機能がございまして、例えば、アンケートであれば、今、アンケートを行っておりますというお知らせをさせていただきまして、それに気づいた方がタッチをしていただきながら、タップをしてアンケートに入らせていただくという仕組みです。

ですから、プッシュ型ではあるのですけれども、それに応じていただければというところがございます。

○片山委員 分かりました。

5,000件の登録というのは、LINEのほうではないのですね。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） はい。さっぽろ圏スマートアプリのほうがか五千数百というユーザーでございます。

○事務局（神市民自治推進室長） 私から、補足といいますか、認識合わせをしたいと思います。

今回のツールは、例えばこういったものがありますということです。今日の2つ目の成人の日行事の議題でも出てくると思うのですが、今回、市民意向を把握する手段として、アプリがあります、LINEでやる方法もあります、それから、少しハードルが高いけれども、開発をすれば、それぞれ属性に応じた住基システムに連動したものもできます。例えばこんなものがあって、ほかにも簡単にやれるものがあれば提案をいただきたいので

すが、例えば、こういうものを使いながら成人の日行事をやったときに、どういうものが一番機能するのかということの例というか、あくまでも試しにやっていただくためのツールをご提案しています。

将来的には市民意向を把握するものを組み立てていかなければいけません、今、これを組み立てるのではなくて、既存のものを使いながらということですね。例えば、3つ目のお金がかかるというものをやるとすれば、システムはつくれないので、はがきを出してというパターンになると思います。今、いきなり6,000万円をかけることはできませんので、今までどおり属性に応じて郵送して回収するというアナログの方式をかませなければいけないのだけれども、大きく3つのやり方がある中で、これを活用して、これから成人の日行事をどうしていくのか、そのためのツールということで提案させていただいています。

これから先はこれでやっていくということとは違うので、そこは確認をお願いします。

○鈴木座長 神室長、認識の確認をありがとうございます。

前回の会議でも、成人の日の行事を題材として何か実験をできないかというお話があったと思います。今回、さっぽろ圏スマートアプリとLINE、市民アンケートシステムの改修等によるアンケートツールの開発ということで、今後考えられるものをご提示いただきましたけれども、今後の日程や実際の改修作業を考えますと、神室長もおっしゃっていたように、今回はアナログも少し絡ませながら進めていくのがよろしいと思っています。

そういう中で、将来の仕組みも見据えつつ、この後に議論していただきます成人の日行事を題材とした実験についてということで、とりあえずどういう一歩を踏み出すかということだと思います。

○山崎委員 質問です。

僕はこのような話を理解するのが不得手なものですから、確認の意味を込めて伺います。

まず、ツールである、さっぽろ圏スマートアプリも札幌市公式LINEも、不特定多数の人だけに発信して、不特定多数の人の属性は、特別な仕組にしないと返ってこないという理解でよろしいのでしょうか。

例えば、上のスマートアプリなら、5,000人に出して、ご説明いただいたぐらいのところの属性は特定できるけれども、それ以上のところはなかなか細かくなりません。そして、LINEも、マイナンバーカードの認証を使えばいろいろできるという基本的な理解でいいのでしょうか。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） そのとおりでございます。

今、さっぽろ圏のアプリは五千数百というユーザーがいますが、まずはこの方々を増やさなければ不特定多数にはなりませんので、このアプリをダウンロードしていただくというハードルがあるということです。その上で、アンケートにお答えいただければ、先ほど申し上げました4つの情報は属性としてキャッチできる、ご協力をいただけるという

ことです。

○山崎委員 そのことを踏まえて、これから議題（２）の成人の日のテーマについて掘り下げていくときに、若者、地域、様々な世代というように、取りあえず３つぐらいの特定のターゲットがあるわけですね。これをさっぽろ圏スマートアプリでどこまで使い分けることができるのか、札幌市公式LINEで、若者、地域、その他現役の世代ということを使い分けることができるかどうかに関しても、一番最初にいただいたスマートアプリだったら４つの属性であるとか、札幌市公式LINEであれば、結局、マイナンバーカードをかませないと駄目だという理解でいいですか。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） おっしゃるとおりです。

例えば、LINEを入り口にしてアンケートフォームでアンケートをしていただくとすれば、アンケートにお答えいただく際に、属性も一緒にお答えいただくということで、結果として属性を頂戴できるという方法はあると思います。

○山崎委員 １番目のものなら５,０００人に、２番目は１８万７,０００人に、どのぐらい返ってくるかは分からないけれども、とにかく、ぱっとやるということですね。では、返ってくるかどうか分からない、やってみないと分からないというアンケートになりかねないところがあるわけですね。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） 対象に対してのアンケートの回収率になるでしょうか、これはやってみなければ分からないということになるかと思います。

○山崎委員 前回からのところで１つご協力できると思っているのは、例えば、私の授業で、学生に対して時間を取って説明して、札幌市の方に来てもらうかもしれないけれども、皆さん、スマホを出して、登録して、では、時間をあげるから成人式のことについてということではできると思いますが、そういったことをスマートアプリでやっても、公式LINEでやっても、何月何日の何時間目の僕の授業で答えた北大生だというふうに特定することが可能かどうか、いかがですか。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） アンケートを広く行った際に、授業に参加されている生徒の皆様の回答を抽出するということですか。

○山崎委員 スマートアプリないしはLINEを学生にやらせて、その場で答えさせたとして、その事柄だけを切り取るといいますか、５,０００人とか１９万人に埋もれないで取ることができるかどうかです。

○鈴木座長 日時でクロスを取るということですか。

○山崎委員 日時でも何でもいいのですけれども、北大生の動向として、例えば、成人式をどう考えているかというところを取れるかどうかです。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） スマートアプリで申し上げますと、属性については４つの情報しか入れていませんが、ユニークのIDを振ってはおりますので、そこから個人の情報を抽出というのは、技術的にできると思います。あとは、アンケートで同意いただいたものを分析する際に、特定の方々を選び出していくということは、技術

的には可能だと思いますが。

○山崎委員 例えば、アンケートフォームで、あなたの大学はどこですかということで、1、北海道大学、2、北星学園大学、3、大谷大学、4、市立大学というふうにして、これは実験であって、ここの大学生なのですね、実験だから協力してくださいねというように学生の同意を得てやるというようにしないと無理だということですね。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） そうですね。アンケートにお答えいただく際に、どこの大学の学生なのかをお答えいただくということになります。

○山崎委員 そのように1問かませればいいということですね。

そのように、アンケート項目を工夫することによって、回答者をもう少し深掘りして分析するという工夫をする、5,000人、19万人に埋もれないように工夫をするということですね。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） そうです。

アンケートフォームに誘導させていただくということです。そう考えると、LINEのほうが新たなアプリを入れなくても誘導しやすいというところはあると思います。

○山崎委員 だんだん分かってきました。

授業で、皆さん、スマホを出してください、時間を取るから今やってくださいということですね。後からやってね、いつかやっておいてねでは駄目だということですね。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） はい。

○山崎委員 なるほど。

でも、そのようにやっていかないと、特定の政策課題を深掘りして、信憑性に足る数は取れなさそうですね。そこは、アナログとデジタルを組み合わせながら、きめ細かくやっていかないと厳しそうですね。そういう理解でよろしいですね。

○オブザーバー（渋谷スマートシティ推進部長） そのとおりだと思います。

アナログの部分は少なからず必要になるかと思います。前回の会議でのご議論に通ずるところはあろうかと思います。

○山崎委員 分かりました。

○事務局（川村市民自治推進課長） 今、いろいろご議論いただいています、先ほど、室長からも話をさせていただきましたが、さっぽろ圏スマートアプリと公式LINEスマート申請を組み合わせる方法と独自のアンケートツールを開発する方法と3つ出しましたけれども、我々としては、1枚目にあるスマートアプリと公式LINEは、今、いろいろご議論いただいているように、属性を取得するというものでは物足りないと思っています。

この使い方としては、市民の意向を把握するというのが、我々が考えている仕組みの中の1つの命題ですので、大体の傾向値をつかむというところに関しては何となく使えるのではないかなというふうに我々事務局は思ったところです。

資料の2枚目のアンケートツールの改修という部分は、住基データを使ってやりますので、属性の把握という面では結構がっちりいけます。ですから、属性ごとにしっかり把握

していかなければならない、傾向値よりももっと踏み込んだ調査をしたいというときには有効なのではないかと思っています。

この後にご議論いただく成人式に関しましては、成人式の意向把握をこの3つのどれでやるかというご議論をいただくのではなくて、我々が考えた、今ご説明した特性を踏まえた上での提案です。

先に言ってしまうのですが、ほぼほぼアナログでいくような形になりますので、今、山崎先生が言ったように、北大生という把握はちゃんとできますし、大学ごとにもご協力をいただくような形で案はつくらせていただいています。よろしくお願ひしたいと思ひます。

○鈴木座長 ありがとうございます。

期せずしまして、(2)の成人の日行事を題材とした実験について関連するお話もございましたので、まず最初に、2番目の資料2をご説明いただひてからのほうがよろしいと思ひます。

また、関連しまして、先ほどのスマートアプリやLINEの話をしていただひても構ひませんので、よろしくお願ひいたします。

それでは、(2)の成人の日行事を題材とした実験についてということで、まずは資料のご説明を事務局よりお願ひいたします。

○事務局(寺川町内会支援担当係長) 資料の3ページ目に基づいてご説明させていただきます。

前回、成人の日行事を題材とした実験につきまして事務局からご提案をさせていただきますました。

題材を含めまして、実験の方向性に関しましてはおおむねご了承いただけたと認識しております。したがひまして、今回は、前回に引き続き、実験の内容について踏み込んでご議論をいただきたく、全体のスケジュール感や、若者や地域などの各主体へのアンケート調査などについて説明をさせていただきますたいと思ひます。

では、資料の上半分のスケジュールをご覧ください。

まず、左側のグレーの縦軸の一番上の会議の項目についてでございます。

これは、市民自治推進会議の当面の開催時期をお示ししております。今後もおおむね2か月に一度の開催を想定しておりまして、第5回が5月末頃、第6回が7月末頃、そして、第7回が9月末頃というふうに想定して仮置きしてございます。

実験の大まかな流れとしまして、これからご説明をさせていただきますが、各主体へのアンケートと聞き取りによる調査を5月中旬頃から7月頃まで実施いたしまして、その結果を第6回の会議において報告させていただきますたいと思ひます。そして、それらを踏まえて、各主体が参加する議論の場を8月から9月の期間に開催しまして、第7回の会議で報告を行うというような流れを想定しております。

なお、紙面の都合により割愛しておりますが、9月以降も必要に応じて2回目の追跡調査も実施することが可能と考えてございます。

次に、左側の各主体について、上から順にご説明をさせていただきたいと思えます。

若者につきましては、まず、19歳の市民3,000人を無作為抽出しまして、紙とオンラインを併用する形でアンケート調査を実施する案としております。また、大学生につきましても、委員の皆様のお力をお借りするなどして、各大学における調査実施にご協力をお願いしたいというふうに考えてございます。

次に、地域に対してですが、各区の実施委員会ごとに様々なご意見やご意向があると認識しております。したがって、可能な範囲で調整の上、行政と意見交換、もしくは何らかの形でご意見をお聞きしていきたいと考えております。

次に、そのほかの方々ということで、「現役世代等」と記載してございますが、前回の会議におきまして、親世代の方などにも意見を聞いたほうがよいのではないかとのご意見を頂戴しております。したがって、若者、地域以外の方にもアンケート調査を実施したいと考えています。手法といたしましては、LINEなどを利用したオンラインの形でのアンケートを想定しております。

最後に、行政についてですが、区役所を交えまして庁内での議論、それから、地域へのヒアリングなどを行いながら、成人の日行事に関する在り方を検討してまいりたいと考えております。

それらの結果につきましては、先ほど申し上げましたように、第6回会議へのご報告をし、次のステージとして、若者、地域、行政などによる議論の方法の検討を行うことを想定しております。

なお、議論の具体的な方法に関しましては、これまでファシリテーターの活用、ミニ・パブリックス型の熟議の手法、ワークショップ形式での実施などについてアイデアが出ております。これらについても、今後、効果的な手法についてご議論いただきまして、実施方法を検討したいと考えております。

以上が当面のスケジュールでございます。

次に、資料の下半分のアンケート（第1回及び意見交換）というブロックをご覧ください。

5月から7月にかけて実施していく事前調査のより具体的な内容についてでございます。

なお、先にお断りをさせていただきますが、実際にアンケートを行う際には、表現を含めてしっかりと文章を整えたいと考えております。資料上の記載は、あくまでも趣旨をつかんでいただくための記載ということでご了承ください。

趣旨の説明についてですが、ここでは3点のポツにポイントを記載してございます。

繰り返しになりますが、趣旨を調査対象の方にしっかりご理解いただくために、詳しく成人の日の行事の置かれている状況や背景などについて説明書きを用意したいと考えております。

その上で、各主体に対しましては、それぞれ白い囲みの中に記載の質問事項について事務局でたたき台としてご用意しておりますので、このような形でご回答をいただきたいと

考えているところです。

これはあくまでも素案ですので、内容に関してもご意見等を頂戴できればと考えております。

まず、左下は、若者への質問事項ということで、素案を10項目記載しております。

基本的には、各設問に対して選択肢を設けることを想定しておりますが、自由記載欄についても設ける予定です。

次に、右上の地域への質問事項について4つ記載しております。

①から④のような内容について、行政から意見聴取を行いたいと考えております。これは、アンケートのような形ではなくて、行政側から対面などの形で聴取することを主に考えたいと思っております。

最後に、その他の現役世代などへの質問事項についてですが、LINEなどを利用してオンライン調査を行いまして、質問内容については、若者と地域への質問事項をアレンジいたしまして、これも仮ですが、8問程度の質問をご用意したいと考えております。

なお、実際の調査に当たりましては、本日のご議論、ご意見などを踏まえて調査票を整えまして、後日、委員の皆様にもご確認いただいて、最終確定したもので実施したいと考えております。

説明としては以上です。ご議論のほど、よろしく願いいたします。

○鈴木座長 ご説明をありがとうございました。

ただいま、資料2を基にご説明いただきましたけれども、ご質問、ご意見等がございましたらお願いします。

○梶井委員 質問をさせていただきたいと思えます。

まず、議題（1）でツールの種類を説明していただきまして、それぞれにメリット、デメリットがあるということで、大変分かりやすかったです。ありがとうございます。

これを踏まえて、実証実験として成人の日行事についても、紹介していただいた3つのツールにプラス紙媒体であるのかどうかの確認と、どのツールを使ったらどういう傾向値が出た、紙だったらどうだったという結果が出た場合に、それぞれのツールごとの比較ができるのかどうかについて教えていただければと思います。

○事務局（川村市民自治推進課長） 成人の日行事の実証実験に関しましては、議題（1）でお話ししました3つのツール全てを使うことは想定していません。成人の日の実証実験は、ツールの実験ではなくて、まず、主体となる人がどういったことを考えているのか、どういった思いを持っているのかということ把握した上で、その当事者同士が議論をして何らかの着地点を見出すという全体的な実験であるという位置付けです。

○梶井委員 分かりました。あくまでも成人式に関する意識調査が一番重要な目的ということですね。

○事務局（川村市民自治推進課長） 成人の日行事については、意識調査プラス、主体によって、若者、地域、行政でおのおののスタンスが異なるはずなのです。その異なる者同

士が議論をして、何らかの新しい形や落としどころを見つける、このプロセスの検証というふう位置付けています。

○梶井委員 分かったような、分からないような。

○三上委員 成人の日をどう思っていて、みんなが話し合っ、どうしたいのかを決めるところがゴールでいいのですか。

○事務局（川村市民自治推進課長） そうです。

○野田委員 私も、梶井委員がおっしゃられたような疑問を持っています。

たしか、声なき市民、サイレントマジョリティーの声をどう反映していくのかということがそもそも議論の前提であったような気がします。それを、いろいろツールを増やすことによって、手軽に意見を出せるような人たちの意向を把握していくと。そのために、今回でいけば、LINEを使うということです。LINEを使った場合の結果と紙ベースでやった場合の結果を比較してみると、LINEのほうが割といろいろな階層の人が手を挙げていたりとか、LINEを踏まえると全体が違った結果になるということが分かれば、サイレントマジョリティーの人たちの声を吸い上げることで、市政運営の本当の市民ニーズが把握できる、そういう理解であったような気がしています。

今回、LINEによる調査の結果とそれ以外の紙媒体の調査の結果をもし比較しないということであれば、サイレントマジョリティーの議論は、前の議論で一旦終わりというイメージですか。

○事務局（川村市民自治推進課長） すみません。私の説明の仕方が悪かったと思いますけれども、紙の結果と公式LINEを使っのその他現役世代等となっていますので、LINEのほうが若者が回答してくる可能性はあると思います。そういった比較はできますし、そこはやるべきだと思っていますけれども、成人の日行事を題材とした実験というものの全体の意味合いとしては、先ほど説明したように、意向把握をして、それを踏まえた議論をして着地点を見いだす、そこまでの実験だと考えています。

もう一点、意向把握という部分では、サイレントマジョリティーの捕捉というのはこの会議体の大きな目的の1つだと思っているのですけれども、そのために、議題（1）で話したアプリの活用とか、新たなシステムの開発とか、そういうことは意向把握というところに特化した部分でもう少し考えていかななくてはならないと思っています。

○梶井委員 調査のゴール点をはっきり決まっいて、まずは意向把握であるということですがけれども、実験と書いてあるのです。この調査の目的として、実験とゴールの着地は別個にあるわけですね。ですから、やってみて、意向を把握して、ディスカッションなども組み合わせて、最終的に成人の日行事をどうするのかというところまでいくプロセスを見るという目的と、もう1つは、こだわるようすけれども、サイレントマジョリティーの声を吸い上げるためにどういうツールが有効だったのか、どのツールの信頼度が高かったのか、そういうところの実験はそれほどでもないということなのか。

要するに、実験とゴールの両にらみというか、2つが並行してあるので、そのあたりを

整理したほうがわかりやすくなるかなという印象を持ちました。

○鈴木座長 整理できるかどうか分からないですけども、今回、成人の日というゴールを目指したときに、若者、地域、現役世代というのはそれぞれ属性が違います。その属性が違う中で、アンケート等でご意見を伺って、乖離というか、属性によって違うと思うのですけれども、それがこの議論、実施の中でどう合意形成されるというか、変わっていくのかというところの意見の変化ですね。その辺は分かると思いますし、結果として、成人の日をどういうふうにしていったらいいのかの意見収集もできるということだと思います。

ただ、サイレントマジョリティーを考えた場合に、ちょっと手間にはなるのですが、こういった現行のツールがあるわけですから、そのツールの中で同じような質問を実験的に流してみても、例えば、成人の日に対して、どういった属性の方に回答をいただけるのか、どういう意見をいただけるのか、その辺も少し分析してもよろしいかと思います。普段、例えばアンケートでお願いしますと、札幌市も100万人アンケートでしたか、10万人アンケートでしたか、あったかと思いますが、アンケートが来たときに、無視すると言いますか、あまり反応しないような層が、例えばLINEであれば積極的にいただけるのか、属性とか回答率も、純粹には比較ができないかもしれませんが、おおむねの傾向をつかめるような気がしています。

そういう意味では、せっかく成人の日という題材があるわけですから、それに乗じてと言いますか、サイレントマジョリティーの実験も少しやってみてはどうかと思っていました。

○事務局（神市民自治推進室長） 鈴木座長が言われたとおり、これはあくまでも事務局の案です。野田委員からも、梶井委員からも、ここはサイレントマジョリティーの動向をつかむために比較できたほうがいいよねということで、ここでは、LINEと郵送をかまして、いろいろな人たちに聞いていったほうがいいということであれば、事務局としてやれるどうかを検討させていただきます。

あくまでも事務局案ですので、そういったご意見が出てくれば、しっかり考えていきたいと思っておりますし、こういったプロセスを踏まえて最終的に議論を深めてやっていくのをゴールと言っていますけれども、実はもう1つ先にゴールがあります。今回の議論を経て、成人式はこういうふうにしたほうがいいのかという結論が出ますと、実際に実施につなげていきます。

ですから、来年の成人式には間に合わないと思っておりますけれども、その次の成人式に、この結果を踏まえてどうするかということに結びつけていきたいと考えております。ただ実験で把握して、こうでしたという報告だけでは終わらないつもりでいます。

○鈴木座長 少し認識のずれはあるかもしれませんが、梶井委員や野田委員がおっしゃっていたように、ついぞという言葉はあまりよくないですが、せっかくこういった実験をやるわけですから、現行のツールを使って、属性の限界はありますけれども、質問項目を入れて、それが正確かどうかはまた後の議論になりますが、それでやってみるのもい

いのかなと思っています。

○事務局（川村市民自治推進課長） 1点、サイレントマジョリティーの話があったので、資料の下段の趣旨説明のポツの3点目にあるように、また、後日、アンケート結果と議論の結果をお知らせするとともに、その結果に対する追加の意識調査も行う予定ということをやろうと思っています。

要するに、アンケートに回答してくれた人、回答してくれなかった人全員にこれをもう一回聞くので、そのときに、あのアンケートに私は回答しなかったけれども、その後こういう使われ方がされて、こういう議論になって、こういう結果になったということが分かると思うのです。そのときにどういった反応を示すのかというところは、サイレントマジョリティーの掘り起こしという面で今後の参考になると考えていました。

○鈴木座長 ほかにご質問、ご意見等がございましたらお願いします。

○三上委員 実験の成果をどう評価するかというところまで意識して設計しないと、ゴールとして落としどころを関係者が決めて、実際の施策としてやってみて、また、やった後にもう一回アンケートを取ったりしないと、結局、こういう決め方で施策は決まったのだけれども、世の中がどう変わったか、要するに、変化を起こさないと世の中は変わっていないので、その変化について、この関係者だけではなくて、周りも変わったかどうかを推しはかるというか、評価をしないといけないのかなど。

実験をして、実験的には何かすごくすんなりいって、この人たちは納得感があったのかかもしれないけれども、その後に行った施策で実際に成人式を体験するのは19歳、20歳の方々であり、アンケートを受けた人ではない人たちが体験して、用意された成人式はあまりよくなかったねという話になってしまう場合もあるので、この施策自体がどう評価されたのか、その辺を評価する手法は最初から考えておかなければいけないと思っています。

ですので、そもそも意図してやるこの手法自体、何を意図してやって、それをどう評価するのかということも事前に考えておかないと、何かやってみて、混乱して、何かあまり議論が深まらなかったねといったときに、何が悪かったのか。ファシリテーターの力量不足というのも議論の段階ではおこりえます。

サイレントマジョリティーがどうのこうのという前に、アンケート対象者の選定の仕方が悪かったということも発生しうると思います。

複数のことを全体として何か形にしようとするときに、一つひとつを意図して選んで、それがどうだったのかということの評価方法も含めて考えておかないと、後から困ってしまうと思いました。

私も考え方がまとまらない中で言っていますが、ちょっと不安になってきました。実験というのは何の実験なのか、どの部分をどう評価するのかを最初から意図しなければいけないと思っています。意図するということは、仮説を立てなくてはいけないので、多分こうなるだろうなということも想定した上でやっていかないと。私は少し不安な気持ちがありました。

○梶井委員 三上委員と同じ気持ちですけれども、その評価ですね。結果に対する評価は簡単かもしれません。こういう結果が出たので、次の年の成人式にこのように反映させた、あるいは、昔のほうがよかったという人が多かったとか、結果に対する評価はそれなりにできるのですけれども、もう1つ、この実験で必要なのは、手法に対する評価もしなくてはいけないということで、それは外せないわけですね。そのための実験だと思います。

少なくとも、最低、結果に対する評価はもちろんのこと、手法に対する評価も何らかの形でなくてはならない。もちろん、どのツールでどのぐらいの回収率があったのかということは簡単に分かると思うのですけれども、それ以外にも手法に対する評価が必要なのではないかと考えています。

○鈴木座長 おっしゃるとおりですね。この流れの手法がいいのか悪かったのかということも何らかの評価が必要かと思っています。

そのほか、ご意見等はございますでしょうか。

○野田委員 今、委員の皆様のお話を伺っていきまして、さらに事務局からのお話を伺うと、特に趣旨説明の中で、もう一回アンケートを行うということですので、例えばですけれども、一番イメージしやすかったのが左下の若者への質問事項の③です。地域が主体となって実施していることをどう思うかが0点から10点まであったとして、賛成するか、賛成しないのかということで、地域主体ではなくてもっと違うやり方がいいと思っている場合は、0点に近い側になって、今のほうに賛成している場合は10点に近い側になるということで、まず、一番最初にこのアンケートを取ってみると。そして、平均点が地域主体に対して7点ぐらいだったと出た場合に、その後に議論をいろいろして地域主体ではないほうがいいのではないかといろいろなことが分かってきて、最後に、いろいろな情報で学習した後にもう一回アンケートを取ってみたときに、7点から5点に変わったとか、4点に変わったとか、こういう変化を見るというのがまず実験なのかなと認識しました。

あわせて、手法に関する話ですが、一番最初に紙ベースで行っているものとLINEで行うものですね。これは、誘導しなければ、若い人たちはLINEのほうがしやすいということで、属性的には若い人たちが多いような気がするのですけれども、そういう人たちが回答している内容は、もともと7点でなくて5点に近かったり、紙ベースのほうのものが8点とか9点に近いとか、そういう手法による違いがあるということも併せて検証できるということで、手法に違いがあるというものが情報提供の前後で収れんしていくのか、変わっていくのかということを見るのかなという気がしました。

なので、趣旨説明の話をちゃんと読んでいけば理解できたと思いますけれども、恐らく情報提供の前後ということと手法の違いなのかなという気がしました。

○鈴木座長 ありがとうございます。そういった認識でよろしいでしょうか。

○事務局（川村市民自治推進課長） はい。

○鈴木座長 情報提供とか、きちっとした議論をしたときに、ほかの人の意見も聞きながら、それもいいねというふうに変っていくこともありますので、多少手間がかかります

けれども、変化を分析していくということが必要なのかなと思います。

ほかに何かございますでしょうか。

今、10項目が挙げられていますけれども、成人の日をどうしたらいいのかというゴールを考えた場合に、以前のお話にもございましたように、同期会的に友達に会えるから出るという人も多いと思うのですけれども、こういった内容があれば出たくなるのかというプラスの要素といいますか、アイデア的なものもアンケートで募集するといいのかなと思っています。

以前、まちづくりの中で、あったらいいなということで議論したことがあるのですけれども、ハード・ソフトにかかわらず、こういうものがあると少し参加したくなるという意向も聞くようにするといいいと思います。

これはアンケートでは少し危険な面があり、これがあったらいいなというのと、それがあると実際にあると実際に参加するかどうかは別の議論になるのですけれども、議論することもきちんと想定していますので、そういった中でも比較できるといいのかなと思いました。

○事務局（川村市民自治推進課長） この質問項目はたたき台ですけれども、この場だけで委員の皆様のご意見を全て伺えると思っていませんので、後日、事務局へのメールでも結構ですので、こういう質問項目も入れたほうがいいのではないか、こういう意味合いのことも聞いてみたらいいのではないかというご意見をいただきたいと考えています。よろしくをお願いします。

○鈴木座長 ほかに何かございますか。

○事務局（神市民自治推進室長） 先ほどの気持ちの変化ですね。若者なりいろいろな方々から出てきたアンケート結果を基にして、8月以降に議論をしていただくということで、そのときに気持ちは変わってくると思っていますが、こういった理解で正しいかどうかを確認したかったのです。

○鈴木座長 結果を受けての変化もありますし、議論の中での変化もあると思います。

○事務局（神市民自治推進室長） きっと、この議論にいろいろな立場の方が入ってくるのだらうと思います。地域の人たちもいれば、若者もいれば、いろいろな方がいて、その中で、成人の日の行事を持続的にやっていくためにはどうしたらいいのかといったときに、気持ちの変化はあると思うので、そこが一番分かりやすく把握できると思っていますし、気持ちの変化とは別に、手法ですね、こういった形でアンケートしたほうがいいというのは別な評価の取り方かなと思っていますが、そういった認識で合っていますでしょうか。

○梶井委員 ワークショップか何かでディスカッションをしますね。そこで意見が変わったということではなくて、追加の意識調査をすることによって結果がどう変わったのか、あくまでもそちらだ思うのです。ワークショップをして、あの人がいいことを言うから、私もちょっと意見が変わっちゃったというのはあると思うのですけれども、そういうことではなくて、アプリの追加調査でこういう結果が出て、地域ではなくて、行政が100%お金

を出してやってもらったほうがいいという意見が75%出ましたけれども、この結果についてあなたはどう思いますかという追加の意識調査によって、どう変わったかということを知りたいと私は理解していました。

両方ありですね。

○事務局（神市民自治推進室長） 今、そうだなと思いました。

○鈴木座長 ちなみに、紐づけしての調査のイメージでよろしいのですか。以前もパネル調査の話をしてしましたが、ある人が追加調査でまた継続して回答するということです。それとも、全体の傾向でどう変化したかをみるということでもよろしいのですか。○事務局（川村市民自治推進課長） 追加調査でいっても、個人までは特定できないと思いますので、今、座長がおっしゃられた後者の形での比較を見ることになると思います。

もし個人の考えがどう変わったかというところまであったほうがいいのではないかと、いうことであれば、このアンケートのやり方を変えるとか、名前も書いてもらうということも考えていかなければならないと思っております。

○事務局（寺川町内会支援担当係長） 19歳の市民3,000人への無作為抽出のアンケートですが、事務局の念頭にあるのは、住基データから対象者を抽出するということです。例えば、アンケート調査時点の19歳であれば、そのときに市内に在住の19歳にアンケート調査を発出することになります。発出した方は、例えば、同じ3,000人を囲って調査するというやり方ももしかしたら可能かもしれません。

さらに補足しますと、札幌市の人口統計上、18歳、19歳の方がどれぐらいいるかということ、1月1日現在で18歳は1万5,482人、19歳は1万7,330人です。今回は3,000人を対象にしますので、差し引くと1万2,000人から1万4,000人ぐらいの方がこの対象から漏れる形になります。例えば、サイレントマジョリティーの議論でいくと、そういう対象になっていない方をほかのものでどう拾えるかというところは、実験として何か工夫する余地があるのかなと思っております。

○梶井委員 追加の意識調査というのは本当に難しいと思います。何をどういうふうに追加して、どこをどうするのか、そこをもうちょっと精緻化していただきたいと思っております。

今おっしゃったように、最初の3,000人の後追いは要らないと思っております。その人がどう変わったかというのは要らないと思っております。むしろ、別個に、こういう結果が1次調査で出ましたが、それについてどう思うかとすると、今まで答えなかった人が反応するかもしれません。自分が考えていたのと違う結果が出ているのかという感じだと思います。ですから、その追加調査によってサイレントマジョリティーの意見を酌み上げるというほうがいいと思うので、後追いはそっちのほうがいいと個人的には思っております。

○事務局（川村市民自治推進課長） 梶井委員のお話を聞いて、そうだなと思いました。

もし個人がどう変わっていったのかを見たいということであれば、これは皆さんにも協力いただかなければならないと思うのですけれども、学生の変化を見るということではでき

ると思いました。

○鈴木座長 学籍番号等で特定してということでしょうか。

○事務局（川村市民自治推進課長） このアンケートを、無作為抽出の19歳の市民3,000人と、先生たちにもご協力いただいて大学内でのアンケートをやっていただいて、学内で議論していただくか、もしくは、代表者何名かが8月以降の議論に出てきてもらうのかとか、いろいろあると思うのですが、それを振り返って、当初から参加している学生全体がどういうふうに変化していったかという見方もできると思いました。

○鈴木座長 そういうふうに分けて考えてもいいかもしれませんね。

○野田委員 梶井委員がおっしゃられたことは重要かと思えます。

私は、追跡していくというほうではあったので、学習効果的な感じで、いろいろな実情を知っていくと意外にできないということが分かってきたり、地域がやってくれていたからうまくいっていたという実情を知ることもあります。

そういうことを考えると、本来は、一番最初に回答した人が、その後、情報提供を受けて、もう一回回答したときにやっぱり変化していく、そこを見るのがいいと思っていました。学術的にもそういう研究が結構あるので、そっちをイメージしていたのですが、実際には、同じ人を特定しながらやっていく必要があるので、集計データ上、同じような属性の人たちの平均値の変化を見ることで類推するというだけでもいいと思いました。

ですので、得られた集計データを基に、梶井委員がおっしゃられたこともできますし、もともとと言っていた20代の特定の地域の人たちの意向の平均値がこう変わったということも見られると思いました。

それを細かくやろうと思うと、山崎委員の授業とか、クラスの人をお願いしてということをやってもらわないとなかなか難しいと思いました。

○鈴木座長 ありがとうございます。

ほかに何かございますでしょうか。

○片山委員 対象を特定できない場合に良い方法があります。2回目のアンケート回答時に、あなたは1回目のアンケートも回答しましたかという問いに「はい」とした人に、あなたは1回目と2回目で考えが変わりましたかというように、その人が変わったという認識を聞いてからその理由を聞けば、そこは取れると思います。

○鈴木座長 取り方のご提案でした。

個人情報の問題もございますので、大学の授業の中で理解してもらって、同意を取って実施することは別としまして、不特定多数に調査することに関してはいろいろなハードルもありますので、その辺にも配慮しつつ、あまり手間をかけずにやってもいいと思いました。

ほかに何かございますでしょうか。

三上委員に振って申し訳ないですけども、議論のところで、ファシリテーターの活用やワークショップなどもご提案されています。こういった流れにおいて、三上委員はワー

クショップをかなりやられていますけれども、その辺の位置付けや工夫などについてご意見があればいただきたいと思います。

○三上委員 工夫ですね。

○鈴木座長 工夫といいますか、仕掛けといいますか。

○三上委員 もしワークショップ形式でやるとしたら、本当にフラットに、結果を求めずという感じになるかと。仕掛けているワークショップというのは大体こういう方向かなという方向決めの中でやっていることが多いと思うのです。ただ、私がやっているのは、答えがないワークショップというか、題材と、それを深めていくということで、最後はその人に行動変容が起きるかどうかを主眼にしています。ですから、ここを落としどころにとか、こんな意見が出るだろうなという結論をイメージすることはなくやっています。

今回の参加者の構成でいくと、それぞれに思いはあって、アンケート結果もある程度見えている中ではありますけれども、何かに誘導することなく、フリーでやっていく感じになるかと思います。今まであんまりそういうことは札幌市としてはやったことは多分ないと思うので、その中でどういう結果が出るかはちょっと想定できない中で、うまくやっていくという仕掛けづくりをしなければいけないなと思います。

ですから、ワークショップをデザインするとき、一番最初に関係者のフラットな関係性をつくるということで、アイスブレイクと言ったりウォーミングアップと言ったりしますが、丁寧に行かないと、そもそも対立型でやっていくとあまりいい意見が出ることはありませんので、そういうウォーミングアップから時間をかけて、少しずつ情報提供して、それを皆さんがどう考えていくのかとか、いろいろな方とミックスして話せるように、特定の人で、最初から最後までというよりも、自分と違う属性の方と話したり、同じ属性の方も含んだりというふうにして、少しかき混ぜて、気持ちの揺さぶりを少しかけながらやったほうが、もしかしたら理解が深まるのではないかと思います。

デザインするのは難しいですし、ファシリテーターも、どういう形で、何人でやるかにもよりますけれども。これは何百人ぐらいという想定はあるのですか。

○事務局（川村市民自治推進課長） 現時点ではまだ想定していません。アンケートを取って見て、そのデータを見てやり方を考えていきたいと思っています。

○三上委員 人数にもよりますし、あまりたくさんでやっても雑駁になる感じではありますので、それによってワークショップのデザインを変えていかないとならないなど。ある程度の方々が納得感を持って、また、意思決定の質を重視するのであれば、意思決定の質と納得感の質を上げるという工夫でファシリテーションの仕方も変わってくると思います。

○事務局（神市民自治推進室長） 議論のところは、当然、フラットな形でやっていただきたいと思っています。行政側が誘導するというのではなくて、それぞれの立場でいろいろな話をして、いろいろな情報を伝えて、そういったことを基にして結論を出してもらう、ミニ・パブリックスという手法が取ればいいのかと思っています。

ただ、それはなかなか難しいことですので、どうやったらそういったことができるのか

というのは、これからいろいろ勉強しながら、夏、秋にかけてのものの仕組みはつくっていきたいと思っています。

○三上委員 どこかでやっている例があるのであれば、それを体験してみたり、見に行ったりをしてみたいですね。私も勉強してみたいと思います。

○事務局（川村市民自治推進課長） 特に例はないので、一からやっていきたいと思います。

先ほど人数の話もありましたけれども、例えば、我々が地域と意見交換会をして、区ごとに傾向が異なるとか、ほとんど同じだということであれば、地域は誰か代表で出てもらえばいいという話になると思いますし、その傾向が違うのであれば、おのおのの人が10区ごとにやってもらうということで、10の議論が必要になると思います。それは、データというか、結果を見てから、規模的なものも含めてご相談をさせていただきたいと思っています。

○三上委員 そもそも成人式の単位は区ということが前提であれば、その区の方々がどう思うかという思いを届けたり醸成したほうがいいと思うので、各区で全く違う結果が出るというのも楽しみですね。

すいません。中身に入ってしまった。

○鈴木座長 区によって会場も異なりますし、多少やり方によっても異なってまいります。以前の議論の中で、区によっても違うのではないかという話もありましたけれども、その辺についても想定しながら進めていければいいかなと思っています。

また、ミニ・パブリックスの話をしていただいたのは山崎委員でしたね。

○山崎委員 話題にはしましたが、別に深掘りしたわけではないです。

○鈴木座長 何かご意見があればお願いします。

○山崎委員 この間、私もミニ・パブリックスをそれなりに調べてきたら、ミニ・パブリックスを運営する方法はある程度固まっているので、まずはそうしたものに倣ってやっていくということと、今、かなり注目されていますね。雑誌等を見てみたら特集されていたり、全国でミニ・パブリックスをやられたりという文献も入手してぱらぱらと見ていますが、そうした先進事例や先行事例を踏まえた上でやっていけば、いろいろな工夫や札幌市ならではの運営ができるのではないかと期待しております。

細かいところは、事務局でお調べになられて、また資料で1枚紙にして出していただけると期待しておりますので、よろしくをお願いします。

○鈴木座長 山崎委員も、もし有効な資料がございましたらご提供いただければと思います。

○山崎委員 私の手持ちのものであれば、どんどんお示ししたりお貸ししたりというご協力をさせていただきます。

○鈴木座長 成人式に一番近かった大村委員に伺います。今、流れに関して、変化とかいろいろな話も出ましたけれども、自分に置き換えてみて、ご意見があればお話しいただき

たいと思います。

○大村委員 趣旨説明の3つ目のところで、後日アンケート結果と議論の結果をお知らせするとあるのですけれども、これは、アンケートに関わった住民の方にお知らせするということですか。

私が思ったのは、この実験のプロセス、内容、ストーリー自体が広く住民の方に伝わることで、こういう住民の意見もこういうふうには反映されることがあるのだとか、そういうアンケートにもっと答えてみようかなというふうにはストーリーを伝えることで、サイレントマジョリティーの方とかそれに近い方が、今後、意見を出そうとか伝えようと思うきっかけになるのではないかと思ったので、この実験自体のプロセスや内容を、何らかの形で公開すると思うのですけれども、それが一般の方々に伝わるように、フリーペーパーにして、手に取ってみたいくなるようなデザインでいろいろなところに置くとか、見たくなる工夫があって、この実験の内容がたくさんの人に伝わると、今後、同じようなアンケートや、こういう取組をするときに、興味を持ってくれる人が増えるのではないかと思います。

○事務局（川村市民自治推進課長） 資料上には書いていないのですが、それはちょっと考えていました。

やるからには、実証実験自体に注目してもらわなくてはならないと思っていて、今日はもう帰ってしまいましたけれども、道新さんと読売さんが来てくれていましたが、積極的に書いてくれということもしていきたいと思っています。また、やる前には、ホームページでお知らせをしたり、大村委員がおっしゃられたように、我々はすぐにホームページや広報に頼ってしまうのですけれども、別の周知の仕方もいいアイデアがあったらお聞きして、広めて、その上で実施するというのを仕掛けていきたいと思っています。

○鈴木座長 予算の関係もあるかもしれませんが、市立大にはデザインを学んでいる方がいっぱいいらっしゃるので、フリーペーパーも面白いと思いました。

ウェブとか、PDFとか、紙でなくてもいいと思うのですが、見たいと思うようなデザインの工夫などをしていただけると、ある意味、サイレントマジョリティーの掘り起こしの試みにもなると思いました。

○片山委員 実験のプロセス、内容、ストーリー自体を広く住民に知らせることによって、参加する学生が自分の周りで実験が話題になったりすると、回答する当の本人も心持ちが全然違うと思います。そういう市民意識の醸成が今後起こってくれるといいということなので、すごく重要かもしれません。

ですから、2回目にアンケートをするときも、周りの人とどういった対話をしたかとか、周りから話が聞こえてきたかとか、そういうことを聞いてもいいと思います。家族の中で政治の話をするなんて昭和初期のような感じですが、もしそういうことが起こったら、市民意識の啓発だと思いました。

○鈴木座長 どうもありがとうございます。

ほかに何かございますでしょうか。

○事務局（寺川町内会支援担当係長） 小出しで恐縮ですが、回収率のことに触れさせていただくと、今、3,000人の無作為抽出というところで行政でアンケート調査をした場合にどれぐらいの回収率を想定しているかというところ、2割以上は期待したいと考えております。

というのは、全く同じ対象年齢ではないのですが、昨年12月に市内の18歳から29歳3,000人を対象に無作為抽出をしたアンケートがありまして、その回収率が23.6%となっております。3,000人に送って、大体700件ぐらいが返ってきております。

これは、無作為抽出をした方々に紙の調査票をお送りしているのですけれども、紙で返していただいてもいいですし、アンケートフォームからご回答いただいてもいいですという形式でした。では、紙とウェブの回収の割合はどれぐらいだったのかというところ、実は紙とウェブが半々ぐらいで、紙のほうが少し多いという形でした。18歳から29歳ですから、いわゆる若者世代と言っていると思うのですが、ウェブでの回答が多いというわけではなく、大体半々ぐらいで、紙のほうが若干多いという結果でした。

これは、区別に回答数や回収率をきちんと集計することもできますので、お送りするときに、区ごとの回収率とか区ごとにどういう回答があったのかを集計することは可能かと考えております。

さらに補足をさせていただくと、LINEを使った令和6年1月のまちづくり戦略ビジョンの基本目標の回答数は、事務局で認識しているのは800件ぐらいでした。これは、友達登録者数18.7万人に対して800件程度なので、数としては物足りないような気もするのですが、調査の設問数が多くて80問ぐらいでしたので、それぐらいの設問数に対しても800人ぐらいご回答いただいているという結果になっています。

以上、補足させていただきます。

○鈴木座長 ありがとうございます。

ほかに何かございますでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

○鈴木座長 それでは、全体を通して何かございましたらお願いします。

○大村委員 質問ですが、5月から7月の若者のところで、大学を通じてのアンケート、議論ということで、こちらにも議論があります。こちらの議論というのは、若者同士の意見交換の場を設けるということでしょうか。

○事務局（川村市民自治推進課長） そういうことを想定していました。

これをどのようにやるかということは、この場ではなくて、個別に皆さんと打合せをさせていただきたいと思っています。

○事務局（神市民自治推進室長） 2か月ごとの会議だけではなかなか決め切れませんので、絶えず委員の皆さんと意見交換をしながら進めていきたいと思っています。事務局案があればこんな感じでやりたいですとか、アンケート項目を含めてですが、そのときに、皆さんが共通に分かる形でやり取りをしたほうがいいでしょうか。個別のほうがいいでし

ようか。

○事務局（川村市民自治推進課長） 同じご質問やご提案のメールは全員に送りまして、聞いた結果を集約してフィードバックすることを考えています。その都度、全員に返信をしていただかなくても、結果は全員にお知らせをするようにしたいと思います。

毎度メールが飛んでいくのは、うるさいですね。

○片山委員 室長が言われるのは、メール上でも議論をしたらどうかという趣旨ですか。

○事務局（神市民自治推進室長） そうです。

○片山委員 確かに、一方通行になってしまいますよね。

○事務局（神市民自治推進室長） 事務局でまとめてしまうと、ちゃんと伝わらないのかなという思いもあったのです。

私は以前、委員が言うことが全員に分かるような形でやり取りをしていました。大変なのだけれども、この先生はこんなことを言っているということをもみんな共通に認識できるのです。ただ、皆さん仕事を抱えていますので、事務局で一旦整理してから渡すというやり方もあります。どちらがいいのかはお任せします。

○鈴木座長 皆さん、どちらがよろしいですか。

○三上委員 ファシリテーターが必要ですね。

○鈴木座長 メール上ですか。

○三上委員 メールでファシリテーターはきついと思います。

○鈴木座長 正直に申し上げますと、全て見られてもいいのですけれども、これまでの少し議論を考えますと、事務局の方はかなり大変だったと思うのですが、的確にまとめていただいていますので、かなり信頼性があると思います。ですから、まとめた形でフィードバックしていただいてもいいのかなと個人的には思っていました。

皆さんはいかがですか。

○三上委員 今は口頭だから進みますけれども、文字にすると、誤字脱字が出たときに、意見の趣旨が変わったりしますし、ニュアンスもありますよね。私は結構適当にしゃべっているのですけれども、メールになると難しい問題があると思います。みなさんご意見がしっかりされているので、逆にはっきりするのですが、それで議論を深める、コントロールするというのは難易度が高いと思います。誰がそれを差配するかにもよると思います。

○事務局（神市民自治推進室長） 事務局でちゃんとまとめさせていただきます。

○三上委員 そのほうがよろしいと思います。

○鈴木座長 では、事務局である程度まとめていただいて情報提供いただくということでよろしいですね。

個別の議論がありましたら個別に問い合わせいただいても構わないと思いますが、そのように進めていただくということで、あんばいはお任せしたいと思います。

ほかに、全体を通して何かございますか。

（「なし」と発言する者あり）

○鈴木座長 それでは、議論はこれで終了させていただきます。

次回は5月から6月ということですね。

○事務局（川村市民自治推進課長） そうですね。

別途、日程調整をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

本日は、どうもありがとうございました。

3. 閉 会

○鈴木座長 これをもちまして、第4回市民自治推進会議を閉会させていただきます。

皆さん、活発なご議論をどうもありがとうございました。

以 上